

山本周五郎
樅ノ木は残った
(上)

新潮文庫

もみきのこ
樅ノ木は残った (上)

新潮文庫

や - 2 - 1



昭和三十八年十一月十日 発行
昭和六十二年十月二十日 五十刷改版
平成元年九月二十日 五十六刷

著 者 山本 周五郎
やまもと しゅうごろう

発行者 佐藤 亮一
さとう りょういち

発行所 株式会社 新潮社
しんそう

郵便番号 一六三

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六―五一一

編集部(〇三)二六六―五四四〇

振替東京四―八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛にご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Tôru Shimizu 1958 Printed in Japan

新 潮 文 庫

樅ノ木は残った

上 卷

山本周五郎 著



新 潮 社 版

1614

樅^{もみ}
ノ
木
は
残
つ
た

上
卷

第一部

序の章

万治三年七月十八日。

幕府の老中から通知があつて、伊達陸奥守の一族伊達兵部少輔、同じく宿老の大条兵庫、茂庭周防、片倉小十郎、原田甲斐。そして、伊達家の親族に当る立花飛驒守ら六人が、老中酒井雅楽頭の邸へ出頭した。

酒井邸には雅楽頭のほかに、同じく老中の阿部豊後守と稲葉美濃守が列坐していて、左のような申し渡しがあつた。

「伊達むつの守、かねがね不作法の儀、上聞に達し、不届におぼしめさる、よつてまず逼塞まかりあるべく、跡式の儀はかさねて仰せいださるべし」

こういう意味の譴責であつたが、

「但し堀ざらいの普請はつづけるように」ということが付け加えられた。

堀ざらいとは、その年の三月から幕府の命令で、伊達家が担当していた、小石川堀の修築工事をさすものである。

申し渡しかみやしきのあと、太田せつのかみ撰津守が上使を命ぜられ、立花飛驒守と伊達兵部との三人で、伊達家の上屋敷かみやしきへゆき、陸奥守綱宗つなむねにその旨むねを伝えた。

綱宗はすぐに品川の下屋敷しもへ移った。

明くる七月十九日の夜。

伊達家の浜屋敷の内にある坂本八郎左衛門の住居へ、二人の訪問者があった。坂本は浪人から取立てられた者で、食禄しょくろくは六百石、目付役めつけやくを勤めていた。

坂本は二人に会った。

二人は密談があるようによそおい隙すきをみて坂本に襲ういかかった。坂本は抜きあわせるひまもなく、その場で即死した。二人は坂本の家人に、「上意討じょういうちである」と云いって、たち去った。

同じ夜、同じ時刻。

やはり浜屋敷の内にある、渡辺九郎左衛門の住居に、二人の訪問者があった。渡辺も浪人から取立てられた者で、正田流ひきたりゆうの槍やりの名手であり、刀法にも非凡な腕があった。食禄は二百四十石、家中の士に槍術そうじゆつを教えていた。

渡辺は会うのを拒んだ。

訪問したのは渡辺金兵衛と渡辺七兵衛といい、二人とも小人頭であるが、どちらも親しいつきあいはないし、そんな時刻に訪問されるような、用件があるとも思えなかった。

「いや、急用があるのです」二人は取次の者に云った。

「こんど御門札を新らしくするので、印鑑をいただきたいのです、明朝から新らしい御門札になるので、ぜひとも今夜のうちに印鑑をいただかなければならないのです」

まえの日に、藩主が幕府から逼塞を命ぜられて、品川の下屋敷へ移った。しぜん門札の更新ということもあり得るので、渡辺は二人に会うことにした。

常着の上へ袴をはき、脇差だけ差し、印鑑の入った鹿皮の小さな袋を持って、渡辺九郎左衛門は客間へ出ていった。二人の訪問者は、膝の前に帳面のような物を置いて、坐っていた。渡辺はかれらを見たが、二人のようすに変わったところはない。

「――御苦勞」と云って渡辺は坐った。

「夜分にあがりました」と渡辺金兵衛が云った。そして七兵衛と共に両手について、低く辞儀をした。

渡辺は袋を膝の上に置いた。低く辞儀をした二人の右手は、それぞれの刀をつかんだ。

渡辺は袋の口の紐をゆるめ、中から印鑑を出そうとした。そのとき金兵衛が片膝立ちになり、刀をすばやく取り直して、抜き打ちに渡辺へ斬りつけた。刀は渡辺の右の肩を斬った。

「なにをする」

渡辺は腰の脇差へ手をかけながら立った。その手には印鑑の袋が絡まっていた。袋の口の

紐が指に絡まっていたのである、——渡辺が立ったとき、七兵衛が左から突つを入れた。渡辺はとつさに脇差を抜いて横に払った。七兵衛の刀は渡辺の腰を刺し、渡辺の刀は七兵衛の肩を斬った。

「なんのためだ」と渡辺が叫んだ。

そのとき右から、金兵衛が踏み込んだ。そして、腰を刺されて体の崩れた渡辺の脾腹ひばらを十分に斬った。渡辺は襖ふすまへよろけかかり、襖といっしょに次の間へ転げこんだ。金兵衛は追つていつて、もう一刀、頸くびから胸へかけて斬った。渡辺は「うん」と呻うめいた。七兵衛は肩の傷を押えながら客間のまん中に立っていた。

そこへ三人の若侍と、一人の若い女が走って来た。侍たちは廊下の左から、——女は奥のほうから走って来て、客間の前で立竦たちすくんだ。

「騒ぐな、上意討だ」

金兵衛が云った。彼は渡辺九郎左衛門が死んだのを慥たしかめてから、客間のほうへ出て来た。「あとから検視が来る、それまで死躰したいに手を付けてはならない、家の中もそのまま、慎しんで待つておれ」

女が叫び声をあげた。

金兵衛が女を見た。女は十八九歳の、小柄こがらな軀からだつきで、勝ち気らしい、だが美しい顔だちをしていた。女は金兵衛の脇を走りぬけ、渡辺の死躰のところへいつて、死躰にとり縋すがった。そして声をあげて泣きだした。

「あれはなに者だ」と金兵衛が訊いた。

三人の若侍たちはすぐには答えなかった。しかしようやく、その中の一人が云った。

「側女のみやという者です」

金兵衛は刀を拭きながら七兵衛を見た。

「大丈夫、浅手だ」と七兵衛が云った。そして、二人はたち去った。

同じ夜の、ほぼ同じ時刻。

伊達家の桜田上屋敷内にある畑与右衛門の住居へ、三人の訪問者があつた。畑は納戸役（禄高不明）で夫婦の間に宇乃という十三歳の娘と、虎之助という六歳の男子があつた。訪問者と聞いたとき、畑はふと不吉な予感におそわれた。漠然としたものではあつたが、まったく無根拠ではなかった。彼は妻をよんで訊いた。

「子供たちは寝たか」

「はい、寝ております」

「すぐに起こせ」と畑は云った、「二人とも起こして、おまえ宮本へつれてゆけ、おまえがつれてゆくんだぞ」

「こんな時刻にですか」

「わけはあとで話す、いそいでゆけ」

妻女は立っていった。彼女は子供達を起こした。どちらもまだ眠ってはいなかった。虎之

助はとび起きて、よろこんで云った。

「どうするの、また遊ぶの」

「静かになさいな」

宇乃がそう云った。宇乃は十三歳であるが、軀つきも大きく、顔もおとなびてみえ、気持もませていた。彼女は母親のようすで、なにかただならぬ事が起こったのだと直感した。それで着替えを終ったときには、もっとおとなびた顔つきになった。

「遊ぶんじゃないの」と虎之助が母親に訊いた。

母親は帯をしめてやりながら「静かになさいな」と云った。虎之助は姉の顔を見て、そして黙った。支度のできた二人をつれて妻女が裏から家を出たとき、客間のほうで高い叫び声と、足踏みをするような物音が聞えた。

「あれ、なに、お母さま」

虎之助が云った。妻女は怯えた^{おび}ように娘の顔を見た。宇乃はおちついた声で、母親をなだめるように云った。

「まいりましょう、お母さま」

妻女は歩きだした。外は暗かった。まっ暗で、爪先^{つまさき}も見えないようであった。宇乃はしゃんとしていた、彼女には母親の怯えているのがわかり、自分がしっかりしていなければだめだと思った。

「お母さま、どこへゆきますの」

宇乃が訊いた。母親が答えた。

「え、ああ、宮本さまよ」

「ただゆけばよろしいの」

「あなた、いつておくれか」

母親は家へ戻りたいようすであつた。それが宇乃にはよくわかつた。宇乃は云つた。

「ええ大丈夫よ、お母さま」

「ではそうしておくれ」

母親は握つていた虎之助の手を宇乃にわたした。そしてなにか云いたげに、娘のほうをすかし見たが、虎之助を押しやって云つた。

「いつておくれ」

彼女は家のほうへ引返した。

宇乃は弟の手を握つて、闇のなかを歩いていった。虎之助の手はふるえていた。彼も幼ないなりに、ようやく不安を感じだし、それをがまんしているのだということが、宇乃にわかつた。

宮本又市は三百石の無役で、無役のまま藩主綱宗の側近に仕えていた。住居は小者長屋の近くにあつた。姉弟が掃除井戸のところまでいったとき、向うから走つて来た者があつた。足袋はだしだったので、足音が聞えず、宇乃がそうと気づいて、よけようとしたとき、激しく突当られてよろめいた。

「お姉さま」と虎之助が叫んで、姉にしがみついた。

相手もびっくりしたらしい、脇のほうへよけながら、かすれた声で云った。

「誰だ、——」

宇乃はその声を知っていた。それは宮本又市の弟で、十六歳になる新八の声であった。宇乃は虎之助を抱きよせながら云った。

「わたくしと弟ですの」

「宇乃さんか」新八は喘いで、宇乃のほうへ近よった。

「宇乃さん、貴女あなたの家へゆくところだ」

「わたくしも」

「えっ、貴女も——」

新八が荒い息をした。宇乃が弟といっしょに出て来たことで、彼には事情がわかったらしい。新八は絶望したように云った。

「ではだめだ、外へ出よう」

「外へですって」

「大変なことが起こるらしい、兄は畑さんに知らせて、それから浜屋敷の渡辺さんのところへゆけと云った」

「わたくし弟といっしょですの」

「不浄門から出よう」

宇乃は弟をひきよせた。

「さあ虎之助さん、あたしに負^おぶさるのよ」

「いやだ、自分で歩くよ」

虎之助は姉の手を拒んだ。

新八がせきたて、いっしょに走りだしたが、すぐに五人の人たちにゆくてを塞^{ふさ}がれた。かれらはお廐^{うまや}のほうから来た。提灯^{ちようちん}を持った二人の小者と、ほかに侍が三人いた。かれらはとつぜんお廐のほうから現われて、こちらの三人をとり巻いた。

新八は畑姉弟をうしろに庇^{かば}った。虎之助は姉にしがみついた。

「こんな処でなにしている」と侍の一人が云った。

小者たちが左右から提灯をさしつけた。呼びかけた侍は三十歳ばかりで、固肥^{かたふと}りの小柄な男だった。声は低く、穏やかであった。

「私は、私たちは、――」

新八は吃^{ども}った。すると侍が宇乃に云った。

「そちらは畑どのの御姉弟だな」

「ええそうです」と新八が吃りながら云った、「そして私は、宮本の新八です」

侍は宇乃を見、新八を見た。

「私は原田家の村山喜兵衛という者だが」とその侍は新八に云った、「こんな時刻にこんな処でなにをしているのだ」

「私にはわかりません」新八はふるえながら云った、「私は兄に云われて、客が二人来たのですが、兄は私に畑さんへ知らせにゆけと云ったのです、畑さんへ知らせて、それから浜屋敷へゆけと云われたので」

「こんな時刻にか」と村山喜兵衛が云った、「こんな時刻に御門を出られると思うのか」

「不浄門から出るつもりでした。不浄門に兄の知っている人がいるものですから」

「いったいそれは、——」ともう一人の侍が云った、「それはどうということだ、なにがあったのだ、なんのために浜屋敷などへゆくのだ」

「わかりません」と新八はまた吃った、彼の声はいまにも泣きだしそうに聞えた、「兄のところへ客が来たのです、私にはわかりませんが、なにか大変なことが起こりそうでした、兄のようすではなにか尋常でないことが起こるように思えました」

「矢崎、——」と村山喜兵衛がもう一人の侍を見た。矢崎という若侍は頷いて、小走りに向うへ走っていった。村山喜兵衛は新八に云った。

「こちらへおいでなさい」

「どうするんですか」

「いまようすを見にやったから、どんなぐあいかわかるまで、向うで待つがいいだろう」

村山喜兵衛は虎之助のほうへ歩みよった。

「坊、いっしょにおじさんのうちへゆこう」

虎之助は姉を見た。喜兵衛は跣かかんで云った。

「抱いて行ってやろう」

「歩いていく」と虎之助は云った。

村山喜兵衛は、三人を、自分の小屋へつれていった。それは、宿老原田甲斐しゆくろうの住居に付属する、長屋の一と棟むねであった。

三人は部屋へあがった。新八はひどく昂奮こうふんしていた。顔色もまっ蒼さおだし、唇くちびるも白く乾いて、そうして、絶えずぶるぶると軀からだをふるわせていた。灯ひのあかりでそのようすを見て、宇乃はまた自分はしっかりしていなければならない、と思った。

「おうちへ帰ろう」

虎之助がそつと云った。宇乃は弟の背中をさすった。

「おとなしくしていてね」

「おうちへ帰ろう」

「そんなことを云わないの、もうすぐお母さまが迎えにいらっしゃってよ」

「お母さまが来るのか」

「ええ、いらっしゃるわ」

村山喜兵衛は戸口にいた。

虎之助が云った。

「お母さま、ほんとに、迎えに来るのか」

「そうよ、だからおとなしく待ってるのよ」